

秋彼岸法要 九月十九日（月曜日＝敬老の日／祝日）午前十一時から

彼岸法要後

ジャズだ ドラムだ バイソン片山だ

バイソン片山といつても生粋の日本人です。東北は気仙沼生まれです。気仙沼生まれの片山と聞いて思い出してくれる人がいたらうれしいのですが、四年前にカッサバと称して音楽説法をしてくださったのが気仙沼市・地福寺住職の片山秀光師。師の弟さんがバイソン片山。なぜ、バイソンなのは当日、うかがいましょう。

編集後記

○『日経おとなのOJT』といつも刊誌があります。7月号は「じつすく〜葬式＆墓じたく」という特集でした。雑誌がこの手の特集をするのは珍しくないこの頃、普通は買わないのですが、今一番の売れっ子仏教学者・佐々木閑先生の「お釈迦様の葬式はド派手葬だった」という記事があるので、買ってみました。他には、生前葬コンサートをした小椋佳さんのインタビューもあります。「本邦初！お寺さん冷や汗・全国地域別葬式の布施金額一覧」などという、けしからん「一ナーナーもあります。それなりに、ためになる特集ですが、一つだけ信用しないで欲しいのが広告です。葬儀と墓の特集ですから、葬儀社の広告が一社だけありました。この葬儀社の親会社は石材店で日本各地に納骨堂のビルを建てていますが、ちょっと危ない企業です。危ないけれど、ジャスマックという株式市場に上場し、その事を宣伝文句にしていますからご要心。

○月刊誌といえど、総合仏教誌『大法輪』の

七月号の特集で、住職が「さいの河原の地蔵和讃」の解説をしています。隔月で連載している「暮りしに生かす禅ライフのすすめ」も十四話になりました。『大法輪』誌の凄いところは、教団発行のPR誌とは異なり、図書館にもある街の書店でも売っていることです。

○右にある「見つけた」欄で紹介したことです。

不連続シリーズ「見つけた」

掲載した写真はお正月にも紹介しました。その時は住職のミスでカラー写真ではなかったので、もう一度載せます。佛教伝道協会発行の二八年・日めぐりカレンダーに採用された写真で、檀家の千田完治さんの撮影です。この写真には「降る雨は同じである」という言葉が添えられています。

この言葉を、どういうふうに解釈するか。いろいろな理解のしかたがあるけれど、「降る雨を喜ぶ人もいるけれど、嫌う人もいる」と受け取るのが禅的ではないかなー。歌人の永田和宏さんに次の歌があります。

濡れながら 若者は行く 楽しそうに
濡れゆくものを 若者と言つ

永田さんの伴侶は、歌人の河野裕子さんです。河野さんは平成二二年に亡くなっています。その闘病生活をつづった『歌に私は泣くだろう』は、テレビドラマにもなったのでご覧になつた方もおられるでしょう。

「濡れながら」の歌ですが、雨がふつても傘もささず、カッパも着ずに通学路を自転車で走つていく高校生を見ると、「若いなあー、いいなあー」とうつやましい思いで後ろ姿を見送ります。でも、もう一度、あの頃に戻りたいかというと、そういうは思わない。傘で思い出すのは、作家の沢木耕太郎です。沢木さんは就職した初日の朝、雨の交差点をたくさんの

この言葉を、どういうふうに解釈するか。いろいろな理解のしかたがあるけれど、「降る雨を喜ぶ人もいるけれど、嫌う人もいる」と受け取るのが禅的ではないかなー。歌人の永田和宏さんに次の歌があります。

この言葉を、どういうふうに解釈するか。いろいろな理解のしかたがあるけれど、「降る雨を喜ぶ人もいるけれど、嫌う人もいる」と受け取るのが禅的ではないかなー。歌人の永田和宏さんに次の歌があります。

街かどに禅を探し現代に仏教を見つける

連続シリーズ



サラリーマンが傘をさして渡るのを見て、あの中の一人にはなりたくない、会社をやめます。入社日が退職日になりました。

これって、後になつて文学賞を受賞するような作家になつたから許されるけれど、ただのブータンだつたら叱られます。

以上は傘をささない人の話でした。次は、傘をさす人の俳句を紹介します。

浜までは 海女も簾着る 時雨かな

作者は江戸時代の瀧瓢水（たきのひょうすい）＝一六八四～一七六一）です。瓢水は今まで言えば兵庫県加古川市で豪商の跡取りとして生まれますが、

遊びが過ぎて一代で身上（しんじょう）をつぶします。そんな瓢水のもとへ禅僧がたずねてきます。瓢水は風邪を引いたくらいで、薬を買いに行くことは、噂ほどではない」と言つて帰つてしまつ。しばらくして帰つてきた瓢水が、その話を聞いてよんだのが、「浜までは」の句です。

茶の湯の祖、利休居士の「降らずとも笠の用意」に通じる心です。このように、「降る雨は同じ」でも対応はそれぞれです。

それゆえ、「おのれの狭い視野にどどまつて、同じ角度からだけ見てじてはダメだよ。ちょっと見方を変えてじぶん。楽に生きられるよー」と、禅は教えます。



伝道協会の初代会長は精密機器メーカー「ミツトヨ」の創業者です。企業で得た利益を社会還元するために作られた団体です。同じようないい理念で、企業のバックアップにより仏教の布教につとめる団体が他にもいくつあります。その中のひとつが来年から活動を縮小して月刊誌の発行を休止するという通知が届きました。理由は、雑誌を支えていた企業が、大企業の傘下にはいったから。どういう事かといふと、親会社は超有名企業ですが、宗教関連団体への援助は株主への説明ができないというのです。そんな理由で、特定の宗派教団に片寄らない良質な仏教雑誌が休刊されます。それが、御時世なのでしょう。

○某仏教雑誌を休刊に追い込んだ親会社は、ビルメーカーです。今年の夏から、そのビルを買うことはやめにした私です。ひとりだけの不買運動です。（Kビルを買わないだけで、呑むのをやめたわけではありませんのでお間違えなきよう）

○日経新聞の名物コラム「私の履歴書」で、アイリスオーヤマの創業者・大山健太郎氏が書いてました。「本来会社は従業員のためにある」「株主から口出しされて経営を誤れば被害は従業員にも及ぶ」だから、上場しない。その心意気にあっぱれマークを！世間知らずな坊主のお笑いぐさの戯言でした（住職・博芳記）